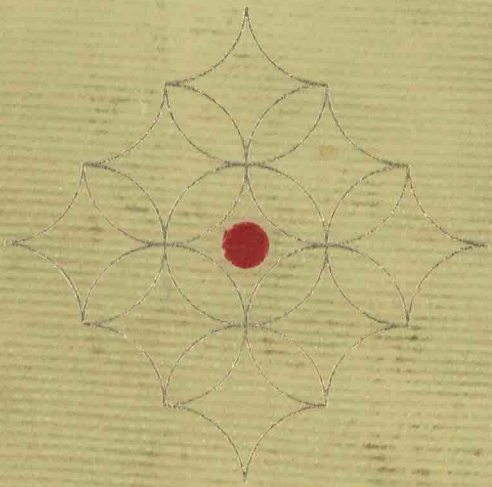

現代日本文學大系

5

樋口一葉
明治女流文學集
泉鏡花

●

筑摩書房

現代日本文學大系　5

昭和四十七年五月十五日　初版第一刷発行
昭和四十九年十月三十日　初版第三刷発行

樋口一葉・明治女流文學・泉鏡花集

著者　樋口一葉　田澤稻舟
三宅花圃　大塚楠緒子
若松賤子　木田治子
北村薄氷　國木田獨歩
田曙　泉鏡花
森しげ

発行者　井上達三

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号一〇一―九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷　株式会社　精興社　製本　株式会社　鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

0393-10005-4604　Printed in Japan

樋口一葉集　目次

巻頭写真
筆蹟
闇桜　三
うもれ木　六
暁月夜　一七
雪の日　二五
大つごもり　二七
ゆく雲　三三
にごりえ　三九
十三夜　五一
わかれ道　五八
たけくらべ　六二
われから　七九
あきあはせ　九三
すゞろごと　九五
日記　九七

明治女流文學集　目次

三宅花圃篇
藪の鶯　一三五

泉鏡花集　目次

若松賤子篇　一四五
お向ふの離れ
木村曙篇　一四七
わか松
北田薄氷篇　一五五
乳母
田澤稻舟篇　一六五
五大堂
大塚楠緒子篇　一七六
お百度詣
國木田治子篇　一七六
破産

森しげ篇　二三
波瀾
巻頭写真
筆蹟
湯島詣　二三
夜行巡査　二七
外科室　二八四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

海城発電　二八九
照葉狂言　二九八
高野聖　三三六
歌行燈　三六一
櫛　巻　三八八
眉かくしの霊　三九五
愛と婚姻　四一三
醜婦を呵す　四一四
いろ扱ひ　四一六

〔付録〕
樋口一葉論　相馬御風　四三三

樋口一葉伝　和田芳惠　四三一
「たけくらべ」の世界　關　良一　四四〇
藪の鶯　宮本百合子　四五五
這箇鏡花観　柳田國男　四六一
鏡花世界瞥見　水上瀧太郎　四六三

年譜　四七六
著作目録　五〇一

樋口一葉集

闇桜

（上）

隔ては中垣の建仁寺にゆづりて汲かはす庭井の水の交はりの底きよく深く軒端に咲く梅一木に両家の春を見せて薫りも分ち合ふ中村園田と呼ぶ宿あり園田の主人は一昨年なくなりて相続は良之助廿二の若者何某学校の通学生とかや中村のかたには娘只一人男子もありたれど早世しての一粒ものとて寵愛はいとゞ手のうちの玉かざしの花に吹かぬ風まづいとひて願ふはあし田鶴の齢ながゝれとにや千代となづけし親心にぞ見ゆらんものよ栫檀の二葉三ツ四ツより行末さぞと世の人のほめものにせし姿の花は雨さそふ弥生の山ほころび初めしつぼみに眺めそはりて盛りはいつとまつの葉ごしの月いざよふといふも可愛らしき十六歳の高島田にかくるやさしきなまこ絞りくれなゐは園生に植てもかくれなきもの中村のお嬢さんとあらぬ人にまでうはさゝるゝ美人もうるさきものぞかしさても習慣こそ可笑しけれ北風の空にいかのぼりうならせて電信の柱邪魔くさかりし昔しは我も昔と思へど良之助お千代に向ふときはありし雛遊びの心あらたまらず改まりし姿かたち気にとめんとせねばとまりもせで良さん千代ちやんと他愛もなき談笑に果ては引き出す喧嘩の糸口最早来玉ふな何しに来んお前様こそのいひじらけに見合さぬ顔も僅か二日目昨日は私が悪るかりし此後はあの様な我儘いひませぬ程におゆるし遊ばしてよとあどなくも詫びられて流石にをかしく解けではあられぬ春の氷イヤ僕こそが結局なり妹といふもの味しらねどあらば斯くまで愛らしきか笑顔ゆたかに袖ひかへて良さん昨夕は嬉しき夢を見たりお前様が学校を卒業なされて何といふお役か知らず高帽子立派に黒ぬりの馬車にのりて西洋館へ入り給ふ所をといふ夢は逆夢ぞ馬車にでも曳かれはせぬかと大笑すれば美しき眉ひそめて気になる事おつしやるよ今日の日曜は最早何処へもお出で遊ばすなと今の世の教育うけた身に似合しからぬ詞も真実大事に思へばなり此方に隔てなければ彼方に遠慮もなくくれ竹のよのうきと云ふ事二人が中には葉末におく露ほども知らず笑ふて暮らす春の日もまだ風寒き二月半ば梅見て来んと夕暮や摩利支天の縁日に連ぬる袖も温かげに。良さんお約束のものの忘れては否よ。アゝ大丈夫忘れやアしなひ併しコーツと何だツけねへ。あれだものを出かけにもあの位願つておいたのに。さう／／おぼえて居る八百屋お七の機関が見たいと云つたんだツけ。アラ否嘘ばつかり。それぢやア丹波の国から生捕つた荒熊でございの方か。何うでもようございますよ妾は最早帰りますから。あやまつたあやまつた今のはみんな嘘何うして中村の令嬢千代子君とも云れる人がそんな御注文をなさらう筈がない良之助たしかに承はつて参つたものは。ようございます何も入りません。さう怒つてはこまる喧嘩しながら歩行と往来の人が笑ふぢやアないか。だつてあなたが彼様な事許かしおつしやるんだもの。夫だからあやまつたと云ふぢやないかサア多舌て居るうちに小間物屋のまへは通りこして仕舞つた。あらマア何しませうねへ未だ先にもありますか知ら。何だかぞんじませんたつた今何も入らないと云つた人は何処に。最早それはいひツこなしとゝめるも云ふも一ト筋道横町の方に植木は多しこちへと招けば走りよるぬり下駄の音カラコロリ琴ひく盲女は今の世の朝顔か露のひぬまのあはれ／／粟の水飴めしませとゆるく甘くいふ隣にあつ焼の塩せんべいかたきをむねとしたるもをかし。千代ちやん鳥渡見玉へ右から二番目のを。ハア彼の紅梅がいゝ事ねへと余念なく眺め入りし後より。中村さんと唐突に背中たゝかれてオヤと振り返へれば束髪の一群何と見てかおむつましいことゝ無遠慮の一言たれが花の唇をもれし詞か跡は同音の笑ひ声夜風に残して走り行くを千代ちやん彼は何だ学校の御朋友か随分乱暴な連中だなアとあきれて見送る良之助より低頭くお千

代は赧然めり

（中）

昨日は何方に宿りつる心とてかはかなく動き初めては中々にえも止まらずあやしや迷ふぬば玉の闇色なき声さへ身にしみて思ひ出づるに身もふるはれぬ其人恋しくなると共に恥かしくつゝましく恐ろしくかく云はゞ笑はれんかく振舞はゞ厭はれんと仮初の返答さへはか〳〵しくは云ひも得せずひねる畳の塵よりぞ山ともつもる思ひの数々逢ひたし見たしなど陽はに云ひし昨日の心は浅かりける我が心我と咎むればお隣とも云はず良様とも云はず云はねばこそくるしけれ涙しなくばと云ひけんから衣胸のあたりの燃ゆべく覚えて夜はすがらに眠られず思に疲れてとろ〳〵とすれば夢にも見ゆる其人の面影優しき手に背を撫でつゝ何を思ひ給ふぞとさしのぞかれ君様ゆゑと口元まで現の折の心ならひにいひも出でずしてうつむけば隠し給ふは隔てがまし大方は見て知りぬ誰れゆゑの恋ぞうら山しと憎くや知らず顔のかこち言余の人恋ふるほどならば思ひに身の痩せもせじ御覧ぜよやとさし出す手を軽く押へてにこやかにさらば誰をと問はるゝに答へんとすれば暁の鐘枕にひびきて覚むる外なき思ひ寝の夢鳥がねつらきはきぬ〳〵の空のみかは惜しかりし名残に心地常ならず今朝は何とせしぞ顔色わろしと尋ぬる母はその事さらに知るべきならねど面赤むも心苦し昼は手ずさびの針仕事にみだれその乱るゝ心縫ひとゞめて今は何事も思はじ思ひてなるべき恋かあらぬか云ひ出して爪はじきされなん恥かしさには再び合す顔もあらじ妹と思せばこそ隔てもなく愛し給ふなれ終のよるべと定めんにいかなる人をとか望み給ふらんそは又道理なり君様が妻と呼ばれん人姿は天が下の美を尽して糸竹文芸備はりたるをこそならべて見たしと我すら思ふに御自身は尚なるべし及ぶまじきこと打出して年頃の中うとくもならば何とせん夫こそは悲しかるべきを思ふまじ〳〵他し心なく兄様と親しまんによも憎みはし給はじよそながらも優しきお詞きくばかりがせめてもぞといさぎよく断念めながら聞かず顔の涙頬につたひて思案のより糸あとに戻どりぬさりとては其のおやさしきが恨みぞかし一向につからばさてもやまんを忘られぬは我身の罪か人の咎か思へば憎きは君様なりお声聞くもいや御姿見るもいや見れば聞けば増さる思ひによしなき胸をもこがすなる勿体なけれど何事まれお腹立ちて足踏ふつになさらずば我れも更らに参るまじ願ふもつらけれど火水ほど中わろくならばなか〳〵に心安かるべしよし今日よりはお目にもかゝらじものもいはじお気に障らばそれが本望ぞとて膝につきつめし曲尺ゆるめると共に隣の声を其の人と聞けば決心ゆら〳〵として今までは何を思ひつる身ぞ逢ひたしの心一途になりぬさりながら心は心の外に友もなくて良之助が目に映るもの何の色もあらず愛らしと思ふ外一点のにごりなければ我恋ふ人世にありとも知らず知らねば憂きを分ちもせず面白きこと面白げなる男心の淡泊なるにさしむかひては何事のいはるべき後世つれなく我身うらめしく春はいづこぞ花とも云はで垣根の若草おもひにもえぬ

（下）

千代ちやん今日は少し快い方かへと二枚折の屏風押し明けて枕もとへ坐る良之助に乱だせし姿恥かしく起きかへらんとつく手もいたく痩せたり。寝て居なくてはいけないなんの病中に失礼も何もあつたものぢやアないそれとも少し起きて見る気なら僕に寄りかゝつて居るがいと抱き起せば居直つて。良さん学校が御試験中だと申すではございませんか。アヽ左様。それに妾の処へばつかし来て居らしやつてよろしいんですか。そんな事まで気にするには及ばない病気の為にわるいから。だつて何うもすみませんもの。すむのすまないのとそんなこと気にするより一日も早く癒くなつて呉れるがいゝ。御親切に難有うございますですが今度は所詮癒るまいと思ひます。又馬鹿なことを云ふよそんな弱い気だから病気がいつまでも癒りやアしない君が心細ひ事を云つて見たまへ御父さんやお母さんがどんなに心配するか知ればん孝行な君にも似合はない。でも癒くなる筈がありませんものと果敢

なげに云ひて打ちまもる睫に涙は溢れたり馬鹿な事をと口には云へどむづかしかるべしとは十指のさす処あはれや一日ばかりの程に痩せも痩せたり片靨あいらしかりし頬の肉いたく落ちて白きおもてはいとゞ透き通る程に散りかかる幾筋の黒髪緑は元の緑ながら油けもなきいたいたしさよ我ならぬ人見るとても誰かは腸断えざらん限ぎりなき心のみだれ忍艸小紋のなへたる衣きて薄くれなゐのしごき帯前に結びたる姿今幾日見らるべきものぞ年頃日頃片時はなるゝ間なく睦み合ひし中になど底の心知れざりけん小さき胸に今日までの物思ひはそも幾何ぞ昨日の夕暮お福が涙ながら語るを聞けば熱つよき時はたえず我名を呼びたりとか病の元はお前様と云はるゝも道理なり知らざりし我恨めしくもらさぬ君も恨めしく今朝見舞ひしとき痩せてゆるびし指輪ぬき取りてこれ形見とも見給はゞ嬉しとて心細げに打ち笑みたる其心今少し早く知らば斯くまでには衰へさせじをと我罪恐ろしく打まもれば。良さん今朝の指輪はめて下さいましたかと云ふ声の細さよ答へは胸にせまりて口にのぼらず無言にさし出す左の手を引き寄せてじつとばかり眺めしが。妾と思つて下さいと云ひもあへずほろ〳〵とこぼす涙其まゝ枕に俯伏しぬ。千代ちやんひどく不快でもなつたのかい福や薬を飲まして呉れないか何うした大変顔色がわろくなつて来たおばさん鳥渡と良之助が声に驚かされて次の間に祈念をこらせし母も水初穂取りに流し元へ立ちしお福も狼狽敷枕元にあつまればお千代閉ぢたる目を開らき。良さんは。良さんはお前の枕元にそら右の方においでなさるよ。阿母さん良さんにお帰へりを願つて下さい。何故ですか僕が居ては不都合ですかエ居てもわるひことはあるまい。福やお前から良さんにお帰へりを願つておくれ。貴嬢は何をおつしやいます今まで彼れ程お待遊ばしたのに又そんなことをエお心持がおわるひのならお薬をめしあがれ阿母さまですか阿母さまはうしろに。こゝに居るよお千代や阿母さんだよいゝかへ解つたかへお父さんもお呼申したよサアしつかりして薬を一口おあがりエ胸がくるしいアゝさうだらう此マア汗を福やいそいでお医師様へお父さんそこに立つて入らつしやらないで何うかしてやつて下ださい良さん鳥渡其の手拭を何だとエ良さんに失礼だがお帰へり遊ばしていたゞきたいとあゝさう申すよ良さんおきゝの通ですからとあはれや母は身も狂するばかり娘は一語一語呼吸せまりて見る〳〵顔色青み行くは露の玉の緒今宵はよもと思ふに良之助起つべき心はさらにもなけれど臨終に迄も心づかひさせんことのいとをしくて屏風の外に二足ばかり糸より細き声に良さんと呼び止められて何ぞと振り返へれば。お詫は明日。風もなき軒端の桜ほろ〳〵とこぼれて夕やみの空鐘の音かなし

（明治二十五年三月）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うもれ木

第一回

描き出だすや一穂の筆さきに、五百羅漢十六善神、空に楼閣をかまへ、思ひを廻廊にめぐらし、三寸の香炉五寸の花瓶に、大和人物漢人物、元禄風の雅なるもあれば、神代様うづたかく、武者の鎧のおどしを工夫し、殿上人に装束の模様を撰らみ、或は帯書きに華麗をつくす花鳥風月、さては清楚を極むる高山流水、意の趣く処景色とゝのひて、濃淡よそほひなす彩色の妙、砂子打ちを楽と見る素人目に、あつと驚歎さるゝほど、我れ自身おもしろからず、筆さしおきて屢々なげく斯道の衰頽、あはれ薩摩といへば鰹節さへ幅のきく世に、さりとは地に落ちたり我が錦襴陶器、おもひ起す天保の昔し、苗代川の陶工朴正官、其地に錦様の工みなきを歎じ、歳十六の少年の身に、奮ひ起す勇気千万丈、奉行を説き藩庁に請ひ、竪野に二人の教授をむかへて、相伝法受の苦を尽くしつ、猶心胆をねる幾春秋、安政のはじめ田の浦の陶場に、焼着画窯の良結果を奏するまで、刻苦艱難いくばくぞや、夫れが流れに浴する身の、美術奨励の今日うまれ合はせながら、此処東京の地にばかり二百に余る画工のうち、天晴道の奥を極めて、万里海外の青眼玉に、日本固有の技芸の妙、見せつけくれんの腸もつものなく、手に筆は取り習らへど、心は小利小欲のかたまり、美とは何ぞ儲け口か、乃至吉原洲崎のちりからたつほう、品川にも又捨てられぬ代物ありと、口三味線の筆拍子に、なぐり書きしての自慢顔、兎角は金の世の中に、優でご坐るの妙で候のと言ふ処が、結局は仕切り直段の上に有ること、問屋うけの宜き物一致あり難しとは、そも何方より出る詞ぞ、さればこそ売国の奸商どもに左右されて、又も直下げ又も直下げと、さらでもの痩せ腕ねぢられながら、無明の夢まだ覚めもせず、是れでは合はぬの割仕事に、時間を厭ひ費用を減じて、十を以て一に更ふる粗画濫筆、まだ昨日今日絵の具台に据りて、稽古は居ねふりの白雲頭を、張りこかして手伝はする淵がき腰がきの模様、霞砂子みだれ砂子の乱れ書きに、美といふ字は拭ひさる絵のぐ雑巾の汚れ同様、さりとは雪がれぬ恥ならずや、此儘ならば今十年と指をらぬ間に、今戸焼の隣りに坐をしめて、荒もの屋の店先に、砂まみれに成らんも知れた物でなし、是れほどのこと気のつかぬ、痴漢ばかりある筈なければ、時の勢ひは出水の堤、切れかけたも同じこと、我等ふせぎはとんと不得手、先づは高見で見物が当世ぞと、頬杖つきて宙腰の、ふらふらとせし了簡には自己々々が不熱心を、地震雷鳴おなじ並みに心得て、天だ〳〵と途方途轍もなき八つ当り、的になる天道さま気の毒なり、然りながら夫れも道理、身は蜻蛉洲幾十万の頭かずに加はりて、竈の烟の立居にまで、かしこき大御心なやませ奉る、辱なき心得もせず、大日本帝国の名誉といふ事、摩みくちやにして掃だめの隅に、投げ出す様な罰しらずが、其処等あたりに珍らしからぬ世の中、慣るほど管なるべし、さりとも我れは我が観念あり、握り初めたる筆の因果、よし狂といはゞ言へ愚と笑はゞ笑へ、千万の黄金つんで来るとも換へぬ心を腕にみがきて、軽薄浮佻を才子と呼ぶ明治の代に、愚直の価どれほどのもの、熱心の結果はいかに、斯道の真は那辺にあるか、よし人目には何とも見よ、我が心満足するほどの物つくり出して、我れ入江籟三変物の名を、陶器歴史に残さんずもの、口惜しや赤貧の身の、空しく志しを抱ひて幾年間、此まゝならば胸中の奇計、何に向つて何時描くべき、恨みは是れぞ是れ骨までの恨みぞと、取りしむる右の腕手首ぶる〳〵と顫へて、煮えよ腸、熱涙のみ込みつゝ悲憤の声は現はさねど、誰れいふとなく慷慨先生と仇名して、酒席の噂はづれぬ代り、柴のと扣くもの稀々なれば、友なく弟子なく女房なく、お蝶とよぶ妹相手にして、此処高輪の如来寺前に、夕顔垣にからみ蚊やり火軒にけ

ふる詫住居、渋団扇に縁のある暮しをなしけり。

第二回

散る木の葉にすら、笑みぞあまると聞く十六七を、貧にくるしめば月も花も皆なみだの種、同じほどの小娘が、流行し帯に新形染の裕衣きて、姿どこやら嫋やかに、能く見ればよくもなき顔だちも、三割とくの白粉ぬりくり、幾度じれたる癖直しの、お蔭にふくらむ鬢付きたぼ付き、天晴れ美人の招牌うつて、摺れ違ひに薫る香水の追風まで、ばツとせし扮粧の夕詣で、何を願ひぞ、神さま嘸やお困りの連中に、顧みられて我が形はづると無けれど、快よからねば洗ひざらしの裕衣の肩、我れ知らず窄めて小走りするお蝶、並らぶ縁日の小間もの店に目もくれず、そゝぐは一心兄の上ばかり、願ひは富貴でなく栄華でなし、我が形この上の襤褸に、よしや縄の帯しめよとまゝ、我れ生涯に来べき運、あらば兄様の身にゆづりて、腕の光りの世に現はるゝやう、みがく心の満足されるやう、二つには同じ画工の侮り顔する奴を、兄さまの前に両手つかせたく、仏壇のお二た方に、お位牌の箔つけて欲しきがそも〳〵の願ひ、手内職の手巾問屋に納むる足を其まゝ、霊験あらたかなりと人もいふ、白金の清正公に日参の、こむる心を兄には告げねど、聞かば画筆なげ出して、芸に親切の志、我れまだ其方に及ばずとや言はん、下向はことに家のこと気に成りて、心も足もいそぐ道の、とある小路に夥しき人だち、喧嘩か物とりか何にもせよ、側杖うたれぬやうと除けて通る、多くの人の袖のしたを、洩れて聞こゆる涙ごゑ、ふつと耳に止まりて我しらず差のぞけば、憐れや五十あまりの老女、貧にも限りのなきものかな、我れに比べて今一倍あさましき有様、むかしは由緒ある人か皺める眉目どこか品もあるを、不憫や是れが商売の、何焼とかいふ銅の板、うち渡せし小屋台のかげに頭すりつけて繰りかへす詫ごと、相手は三十計の髭むしやくしやと、見るからが憎く気な奴、大形の裕衣胸あらはに着て、力足ふみ立てつ耳も聾よと喚き立るは、何れ金が敵の世の中、元来は懇意づくの、生ながらに顔赤め合ひしなかでもあるまじきに、始めは伏し拝みて受たる恩、返へすことの成らぬは心がならず、此社会に落入りし身の右左不如意にて、約束せしこと約束のやうにもならねば、我れと恥ぢて心ならぬ留守も遣ひ、果ては言ひ度くなき嘘に、一月を延ばし十五日を過ぐせど、其揚句さて何とも成らず、つまりつまりて烏羽玉のやみの夜、家ぬしの垣の外に両手合はせて拝みながら、不義理不名誉の欠落もすめり、さても此老女その類ひと覚しく、四辺はづかしや小声の言訳、且つは涙ながらの詞とて、首尾全くは聞えぬ物の、取り集めて察すれば、娘にやあらん杖はしらの子、煩ひて居るかの様子、夫れ本復さへなさば又つくべき方もあり、今暫時の間まちて給はれと、あはれ腸しぼり尽くす悲しげな声、聞くお蝶は涙もろの女の身、ましてや同じ情くみて知らぬ事もなければ、何の人事と聞き過ぎられず、さりとは彼の男の聞訳なさ、百円のかたに網笠なれど此屋台おこせといふ、夫取られては私しと娘、今日から喰べる事が成りませぬお慈悲と合す手を、あれ打ちをつた、憎くい奴にくい奴、自分は手前はさして困る様子も無く、大々しい身体つきの病ひ気も無ささうなに、あの老人のしかも病人抱へて、困苦さこその察しも無きは鬼か夜叉か、有らば彼の横つら金で張つて、美事老女救つてやり度きもの、夫れ処ではなき身、此財布の底はたけばとて、何に成る物でなし、口惜しや可愛やと、お蝶身もだえする程残念がり、黒山と立つ人じろり眺めて、切めて一人は此中に憐れと見る人ありさうな物と、歎息する一刹那、お蝶の肩さき摺るほどにして、猶予もなくずつと出し男、何ものと思ふまもなく、獄りたつ鬼男の前、振あぐる手の肘を止めて、軽くふくむ微笑の色、まづ気を呑まれて衆目のそゝぐ身姿は如何に、黒紹の羽織に白地の裕衣、態とならぬ金ぐさり角帯の端かすかに見せて、温和の風姿か優美の相か、言はれぬ処に愛敬もある廿八九の若紳士、老女の方顧みさま詞つき叮嚀に、私し通りすがりの身、来歴は何か知らねど、高が女なり老人に失礼はあり勝ち、あれ御覧ぜよあの通り詫ても居ること、往来は其うちにも人の目口うるさきに、洋刃の厄介も御身分がら如何や、

何と私しに此処の花、もたせては下さらぬかと、青柳のいと優しく出れば、はて扨他人の入らぬ口出し、詫や詞ですむほどなら、我等今頃は手を引く筈なり、済まぬ次第きゝたしとならば聞かせもせん、我等二た月三が月、雨露しのがせた事もある大恩人、その上に彼奴めが口車に乗せられて、五円といふ大金貸したは此方も商売づく、五一の利足はよしや天地が逆さまにもなれ、一人子の病人死にもせよ、待つてやる約束もなければ、負けてやる覚えもなし、夫れに何ぞや泣ごとの数々、地蔵の顔も方図のあるもの、利足の形にも不足なれど、何一つでも取るが取り徳、この代物引取つて行かんといふは、余り無理でも無きつもりと、鼻で笑ふ髭づら憎くし、若き男はから／＼と高笑ひして、何ぞと思ひしに金ですむ事なりしか、さりとては訳もなし、入らぬ他人と言はるれど、何れ四海の内輪同志、金は我れ立て換へんと、紙入れ探ぐつて五円札一枚一円一顆、是れではまだ／＼御不足ならんが、内実持ち合せ是れ限りなり、何と雨露しのがせるほどの大恩人さま、了簡しては遣はされぬかと、飽まで柔和は粧ひながら、否なと言はゞあの純白の拳何処に揮つて、あの髭男微塵になるも知れがたしと、芝居気のある見物が囁き可笑し、彼の男は掻きさる様に、金懐中にねぢ込んで、取り出す証書幾通、幾多の人の涙の種を印刷にせし文言名当て、あれか是れかと探がし出して、よしか慥に渡しましたぞ不足を言はゞまだ／＼なれど、取らぬには増し是れで算用ずみとすれば、老婆めは大した儲けもの、好ひ親分見付け出して是れから利の出ぬ金借りらるゝやら、人事ながら慈善家の末が案じられると、冷笑て払ふ裳の塵、礼も返さず恥ぢもせず人かき分けてのさりのさり、行くての大地裂けもせず、黙づく石の無きも不審し、若き男は老女が陳ぶる礼よくも聞かず、何の／＼是式のこと、有つたればこそ役にも立つたれ、無くは我れと其方様と何づれ替らぬ難義の淵、浮き沈みは浮世の常に、お礼は其方様大分限になられし時、此方より御催促に出るまでは、お預けのことお預けのこと、はて名告をする程聞こえても居らぬ名、先づ夫れもご免なされと、取すがる袖引はなして、優然と去る後ろ影、光明赫灼として輝くとぞ拝まれぬ。

第三回

歳十三の暁より、絵筆とり初めて十六年、一心斯の道に入江籟三、富貴を浮雲の空しと見れど、猶風前の塵一つ、名誉を願ふ心払ひがたく、三寸の胸中欲火つねに燃えて、高く掛るべき心鏡くもりといふは是れのみなり、さればとて世に媚び人に媚ること、生をかへぬ限りならぬ質、我れより頭下ぐること、金輪奈落いやといふ一点ばりに、頑物の名高くなるほど、我慢と意地は満身に行わたりて、入れられぬ世と弥々うしろ向きに成る心、見をれ此腕なにが住むか、一飛得意の暁にはと、人も聞かぬ大言はきて、纔かに熱腸を冷やす物の、扨も諸道のさまたげと言ふ、貧より外に伴侶のなき身、其得意の暁いつとか待たん、弥勒の出世と並らべ立てゝ甲乙の無き物よと思ふに、口惜しの念胸をさして、瞼の合はぬ夜半も多かり、寝ぬに明けたる或る朝、おく庭草の露を見て亡師のことふツと思ひ出し、俄かに寺参り仕度なり、垣根の夏菊無造作に折りとつて、お蝶が暫時と止むるも聞かず、朝飯まへに家を出けり、寺は伊皿子の台町なれば左までには遠くも非ず、泉岳寺わきの生垣青々とせし中を過ぎて、打水すゞしく箒木目のたつ細道を、がらりざらりと百足下駄に力を入れて、纏はる片裾うるさしと、捲くり上ぐるや空臑あらはに、何の見得もなく、身に小男の面ざし醜くからねど、色黒々と骨だちて、高き鼻しまりし口、眼ざしぎろりと青く凄く、沈欝の症何処か淋しく、紺薩の古手に白兵児の姿、懐中に建白書相応なれど、右手に持つ夏菊の花の色、流石にやさしき処も見えけり、心こつて見る目には、映るものも映る物も皆その色、細づくりの格子戸まへに、米沢数寄屋の肌つき美くしき人、黒繻子の帯腰つきすつきりとして、芙蓉の面に淡彩の工合、楊柳の髪に根がけの好み、扨も美かな扨も美かな、此美にすさむ心がけを我が陶画の上に移して、共に協力の友を得たしと、茫然自失ながめ入ればあれ薄気味の悪るき人と、逃こまれて我れながら、取りとめ無き考へ馬鹿らしく、

振むきもせず又五六歩、三歳ばかりの男の子のちよろ〳〵と馳せ出しが、袖なし裕衣の模様は何、籬に菊の崩し形か、夫れよ今度の香炉にあの書き廻しも面白かるべし、注文は龍田川とか、何の我が腕で我が書くに、入らぬ遠慮究竟くさし、先師の言付より外は他人の意見いれたこと無き籟三、身貧に迫つて意を曲ぐるなど嫌やな事なり、さりながら我れ頑物の兄故に、世の人並みのこともせず、米味噌醤油に追ひ使はるゝお蝶、思へば兄風も吹かされねど、成り行と諦らめて居て呉れる様子、夫れも夫なり、時運めぐらば何時かは花も咲くものよ、衡門に黒ぬり車出入させて、奥様と尊めらるゝやうに成るも不思議はなし、嗚呼その衡門よりは、天晴れの人物えらびて添はせたきものと、何がなしに案じてふツと仰げば、今も想像の衡門に、篠原辰雄といかめしき表札、扨も立派の住居かな、主人公はどんな人、身分はいかに、愛国の志しある人ならば、日本固有の美術の不振、我が画工疲弊の情、説かば談合の膝にもと、夢知らぬ人に望みを属す、狂気の沙汰に心もつかず、彼れを思ひ是れを思ひ、何時とは無しに坂も登りぬ、寺門くぐり入れどお僧どの寝坊にや、まだ看経の声もなく、自然の寂寞境に、あさ風さつと松に吹いて、身にしみる心地何とも言へず、本堂をめぐりて裏手の墓処へと、手桶の井らぶ阿伽井のもとを過ぎる時、入江様しばしと呼止める声、少し覚えのと顧みれば、つか〳〵と馳せ寄つて、物言はず大地に両手を突く男、あやしや何者と呆れて立つ、足もとに身を縮めて、お見忘れか但し人外の私、お詞も下されまじとか、正路潔白の君に対して、合はすべき面貌もなく、言ふ詞出処もなき失策、後悔しぬきし改心の今日、我が田へ水の弁解ではなし、懺悔に滅ぼしたき罪のあらまし、聞いて給はる人外になき身、相弟子のよしみ昔なじみ、君を見かけてのお頼みと、頭も上げず詫り入る体、領足美事に耳うらに二つ丼ぶ黒子、夫なり姿こそ変りたれ彼奴新次め、先師が殊に寵愛にて、行々は養子にもと骨折られしを、生地注文にと多分の金引出して、其まゝの行方しれず、師の臨終にも有り合さぬ人非人、今頃此処らを彷徨こと憎くし、何の相弟子失礼至極と、生来の疳癖目尻に現はれて、言ふこと宜くは耳にも入れず、聞き度なしお黙りなされ、相弟子ならば兄弟分、言ふ事あり咎むる事あり責むる事あり、さりながらお前様と我れ何でもなし、他人も他人見ず知らず、入江籟三潔白を尊ぶ身の、友とも仰せらるゝな、中々の耳ざはりなり、其処退きて給はれ、露をさながら志しの手向けの花、萎るゝも口惜しければと、詞少なに行き過ぎる袂、あわたゞしく先づと扣へて、御尤ながら恨めしきお詞、責め給へ咎め給へ、罪と知つて苦るしき身の上、御折檻の答にも逢はゞ、却つて身の本懐なるを、捨てゝ顧見ぬ他人向きの仰せ、昔しの入江様、今日の入江様、お人替りしか、お心二つか、我今までの目違か、君を先師の形見とみて、改心の実も謝罪の情も、君に寄つて現はし度き願ひ、さりとは画餅のお詞かなと、半いはさず振かへる籟三、だまれと一と声鬱憂の気のこりたる余り、物あらば当らん破裂の勢ひ、唇ぶる〳〵と顫へて生来の訥弁いよ〳〵訥に、汝れ新次人非人、恩しらず義理知らず道しらず、汝れが罪の身を責むるは知らず、我を批難するか、我を批難するか、我れ籟三昔も今も、正義を立て公道を踏んで、一歩の過ち覚えなき身、どこの何処に何の欠点、言ひ聞かん言ひ聞かんと、詰め寄る眼尻きり〳〵と釣つて、汝不忠不義の奴も、先師寵愛の余りには、世に其罪を包まれて、知る者は師と我ばかり、我れ一と度言はじと定めて十年近く、此口開かねばこそ汝れ安穏に、月日の光り拝むは誰が庇護、頼まれず共折檻の咎此処にあり、墓前へ手向けん志しの、此花で打つに不思議もなし、打手は籟三精神は先師、口惜しくば身にしみよ骨にしみよと続け打ち、手に持つ菊花なげつけて、白眼つむる眼の内に感じ来れる新次が体、昔しながらの美顔今一層の品を備へて、あはれ好男子身じろぎもせず、瞼にあふるゝ後悔の涙、眉宇に満つ慚愧の状、此人先師の愛せし人、我れに謝罪と思ひ込みし人、憎くむが本義か、捨つるが道か、と許迷つて判断の胸うやむやに成る時、静かに頭を上げて言ひ出る一通り、聞けば誤りたり我れ短慮軽忽の処為、此人の罪罪ならず、とる処岐路に落し不幸の身と、先づ憐みの情より聞けば、私し元来私欲に非らず、小を捨てゝ

大に付く国利国益の策、立てしといふが抑々の破滅にて、思へば了簡が若かりしなり、腕を組みての考へと手を下ろしての実験とは、冠履の相違雲泥の差別、人は我より利口にて、世は思ふまゝならぬ物と、つくづく歎息するにつけて、正義は人間の至宝といふこと漸々に発明し、才ばしりたる考へ身を離れしは、弥々無一物の暁がた、爾来幾年志しを磨きて、遠国他国に流浪の結果、不思議に人らしく世に言はれて、少しは名をも知らるゝ境界、今歳めづらしく帰京の錦、心に飾つて拝顔を楽しみし、師君は此処草陰苔下の人、松風に袂をしぼつて幾朝くむ阿伽井の水の影見ぬ人に残念は増りて、一と層君のこと懐かしく、慕はしかりし昨日今日、打たるゝも嬉しく罵らるゝも嬉しく、真の兄弟に逢ふ心地と、保ちかねてこぼす涙一滴、見る〳〵籟三感歎して、大地につく手まづ上げ給へと扶け起して、知らざりし今までの失礼、知りての後悔、打ち割りし意中に物のなきは見え給ふべし、いざ御墓前に中直りせん、心おく事かと光風霽月、引いて立つ手に恨みも残らず、取なせば、是れも先師の導き、ありし朋友なり相弟子なり、君も訪ひ給へ、お前様も来て御覧ぜよ、お住居は何処ぞ、此処よりは遠からぬ如来寺前に、引結ぶ庵の草深き処が夫れ、偖は目鼻の我が宿も此坂下、篠原と呼ぶが当時の性なり、さりとは奇遇よ辰雄殿とは君の事か。

第四回

月に恨み風に憤り、天下を悪魔の巣窟と見て、黒暗々の中に彷徨し籟三、何処ともなく一点の光り幽かに見えて、前途の企望漸々に大きく成りぬ、以前の新次、今の篠原辰雄と呼ぶ男、有し職人時代には、負けぬ気象の人受けよからず、師匠の愛の夥たゞしきほど、憎くむ者さま〳〵の説を構へ、傲慢と罵り狡猾と嘲りて交際する者稀なるを、籟三例の弱きもの助けたく、弟のやうに贔負せしが、恩は二代の親も同じ、師匠の金持逃するほどの奴、師匠も我れも目違ひと諦めて、愁ひ恥ぢを世に現はさじと、包み通せし七八年目、何処ぞで悪人の仲間入、今頃は何に成りてと、折ふしの思ひ出種、流石に忘れぬ処もありしに、思ひきや今日の身分、変りも変りし立派の紳士に成りて、爾かも執る主義の高潔さ、話し合ふほど頼母しさ増さりて、墓参帰りの半日を篠原のもとに説きつ説かれつ、辰雄今日までの経歴につきても、善事と悪事を洩さず蔵さず、篠原と呼ぶ今の家、何某地方の金満家なりし事、幷処に住み込みの初より、次第に気に入られて一人娘に聟養子と成りたる事、其身戸主と成りて二年とたゝぬ間に、親女房とも引つゞきて病死せし不幸さ、扨その幾万の財産指のさしてなく、我が自由になすも愁らく、家につきての縁類にゆづりて、身退きたき願ひも、世の人さらに聞き入れてくれず、其まゝ安座逸居の身、我が位置たかまるに付けて湧き来る企望のさま〳〵、及ばぬと知つて捨られぬが是れも癖にや、社会の為の東奔西走、此処東京に計画ありて、出京の昨日今日、生中此方彼方に名を呼ばれて、称へらるゝ身汗あゆる心地、昔しをおもへば大恩の師に、よしや理由は何にもせよ重々の不始末もあるを、素知らぬ顔に青天を歩行くさへ、日月の手前恐ろしく、世を欺くに似て心安からず、手を置かぬ胸夢おどろきて、人知らぬ罪中々にくるしかりきと、腹ある限り告白して、屑よしとする様子、表面をつくろひて底にごる、軽薄者流を厭ふ目には、宜くも返りし本善の善、稀なる人よと感じられて、過ぎし過失は美玉のくもり、爾かも拭ひ去つて見るに、却つて光りは勝る心地、籟三しきりに憎くからず成りぬ、中々物語り尽きもせぬに、交際ひろき人のならひ、訪問者陸続とうるさく、何と入江様、人気なき閑静な処にて、一日ゆるりと御高説承りたし、君は何時もお暇かと問はれて、はて扨貧者に余裕はなし、気楽な事いひ給ふな、人気なき処と言はゞ、我れ侘住居の閑静さ、裏の車井に釣瓶くる音か、表に子守り歌きこえる位のもの、此処よりはつひ幷処なり、いつぞは来て御覧ぜよ、麦めし炊かせて薯蕷汁位の御馳走はすべしと無造作の詞、さりとは浦山しきかな、世の事聞かず人に交はらず、何事の憂きも宿らねば、胸中いつも清しかるべく、凡界俗境遠く離れて、取る筆一つに楽みをしる御身分、我れ雲泥の相違と歎息

する辰雄、籟三引きとりて、何の浦山しき身分か、筆心にまかせず業世と合はず、我れと埋もるゝ身のはては、首陽か汨羅か底しらずの境界、さりとは世の中あても無しと笑つて、遠慮なき昔し語りに、胸も開らく障子の外に出づれば、廊下いく曲りか広々とせし住居、実に人の身は水の流れと、物言はず顧みれば莞爾と送る辰雄の姿、嗚呼人物と心にほめて、下婢が直す百足下駄、是れ特色の慚る体なく、喜色洋洋門内を出でしが、帰宅の後もお蝶相手に此物がたり、平常は蛇蝎と忌み嫌ふ世の人、兄さまの褒め者とはどんな人、お蝶見たしと思はねど、喜ぶ兄に我も嬉しく、一日ありて二日目の夕がた、軒ばの榎に日ぐらしの鳴き出る頃、手仕事叮嚀に取片づけ、家の廻り奇麗に掃除して、打水いそがしき門口に、入江様はと音なはれて、誰君と振かへる襷すがたを、扨も美形と見るは辰雄、お蝶はツと心付て、俄にさすや双頬の紅ゐ、色は何の色我れしらず、見しは清正公の彼の時の彼のお人、何として我家へはと、騒だつ胸に是れよりや知る恋。

第五回

床のもとの竈馬かたさせと鳴いて、都大路に秋見ゆる八月の末、宮城の南三田のほとりに、人家二三十戸買ひつぶして、新たに工事をいそぐは何、押たてし杭の面に、博愛医院建築地と墨ぐろに記るして、積み立つる煉瓦の土台に、きやりの声の賑はしきと共、四方に聞えわたる篠原辰雄、憂世のうきを憂きと捨てずして、吉野紙の人情あさましゝと、孤身奮ひ起す愛世済民の法、我れ微力不肖の身の、仆れて止まば休まんのみ、今日細民困窮のあり様、見るに腸たえずやある、知らずや錦衣九重の人、埋火のもとに花を咲かせて、面白しと見る雪の日は、節婦こゞえて涙こほるべく、大廈高楼に岐阜提燈ともしつらねて、風をまつ納涼の夜は、蚊遣火のもとに孝子泣くめり、中に憐れは疾病の災ひ、名医門にあり、良薬ちかきに有つて、爾かも求め難く得がたき身、天命ならず定業ならず、救はるべき命見す〳〵の残念さ、妻の身子の身いくばくぞや、人生れながらに悪意なけれど、迫まりては徳不徳取捨の猶予なく、天を恨み地を恨み、世範これより乱れて国家の末いと危ふし、是れを救ふこと仁にありと、我れ先づ資産を擲つて、一着手を救生の急なるに起し、一方は富国利民の策を講じ、一方は貴顕紳商の門に、協力賛助を求むること切なるに、徳孤ならず何某の殿某の長官、意気投じ処論合つて、甲より乙に美挙を伝へれば、徳義を一つの名誉と心得る輩、何となしに雷同して、世上の評判赫と高く、見ぬ人聞かぬ人名を慕ひ、天晴れ仁者と知らぬ者なくなりぬ、其行ひ其詞見るにつけ聞くにつけ、交るにつけ睦むにつけ、籟三次第に慕はしく尊とく、口腐れ他人に扶助は仰がじと定めし、我慢の角は此人の前に折れて、欝悶の心しのびがたく、我業疲弊不振の物語より、斯道挽回の志し一日の休む間なけれど、実をいはゞ勢力なき身の聞き入れて呉れてもなく、生中説くこと嘘笑ひに成りて、はては後ろ指さゝるること口惜し、さりながら夫も道理、我れ此道に入たちて十六年、まだ一と度の共進会に名を掲げたることもなく、我れ自由の筆貧ゆゑには縛ばられねど、中々の直行にくまれて問屋うけ宜からねば、注文は廉価粗物の外もなく、事心と合せず筆なにとして揮はるべき、不満不満の塊まりは、何の世の中あき盲目ども、是れ相応と投げ出しものにして、意匠もちひず鍛れん馬鹿らしく、品物の面てよごしてやれば、我が血涙を呑みし粗物も、彼れ衣食の為にする粗物も、見る目に何の変りなく、口ほどもなき駄物師と嘲けられて我が名いよ〳〵地に落ちたり、季錬月鍛の筆、経営慘澹の意匠、心に有つて物に描かず、我れ男子の身の精神一到、猶こと成らぬ腑甲斐なさ、世人明なきか我れもし惑へるか、誰れに寄つて語り合さん術なく、冥々の内に重ねし年幾年、君一と度びは斯道の流れに立ちし人、汲み知り給ふ事もあるべし、我が為の名案下し給へと、打明かす意中、辰雄しきりに嘆じて止まず、げに宜くも合へる物かな、我が国家を見る心その外に出る事なし、徳義の廃頽人情の腐敗、是れを憂ひ彼れを歎けど、道に立つ人大方は、濁流汚溝に身を投じて、爾かも汚れを知らぬ輩、味方少なく仇は多し、さりながら捨てぬ処に物は成り立ちて、二人三人の正義の士に、知ら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com